5．藤野陽三（土木工学）／東京大学教授（2002年4月23日）

伊藤　防犯、防災というだけではなく、広く社会、都市に関わっている先生方に一般的な意識というか、そういうことで先生にお願いしたんですけど。

藤野　答えられないんじゃないのかな。

伊藤　実は今回お配りしたものアンケートがこの中に入ってまして、400枚ほど、回収は半分強ほどとなっておりますね。それで一般的な属性に続きまして、社会の安全ということでですね、社会を脅かすものとはどんなものがありますか、とか、記憶に残っているものはどんなものがありますか、とか、近年の犯罪とか凶悪事件とか、昨年に起きた凶悪事件を皆さんどのくらい覚えているのかと、こういったものをチェックした上で、Dは去年テロがありましたので、これは別にヒアリングしないと、皆さんテロに強烈な印象がありますんでね、テロは少し別立てで調査してます。今回のこういった市民の意識と、マスコミ報道のあり方みたいなものを、初年度は基本的な調査ができたなと思っているんですけども、まず先生に問題意識ということでいくつかお聞きしたいんですけど、まず、日本が安全とお感じになるかどうかということですね。

藤野　相対だからわからないと思いますよ。けど、変化だけはわかると思いますよ。絶対値はわからないと思いますよ。普通の人ってのは外国に住んだことは無いと思いますし、噂は聞いてるかもしれないけど。だから変化は微分値でしかわからないんじゃないかと、そういう意味では安全ではなくなっているという意識は強いんではないのかね。明らかに悪い方向というか、率が上がっていると。でも絶対的にいうとアメリカから来る友達とかからすると、日本はやっぱ安全感があると、アメリカの田舎から来る人でもね。だから絶対値でいうとまだ安全なんだと思いますよ。全体的に。

伊藤　その安全の中に犯罪だけではなく、都市のインフラだとか、社会そのもののコミュニティーとかも含まれると思うんですが、特に都市、たとえば東京とか大都市を世界の都市と比べると社会基盤は、他のところと比べると安全ということに関してはちゃんとできているということですね。比較的世界の都市と比較すると、東京は安全なんですけど、東京そのものに住みつづけた人にとっては変わってきていると。

藤野　東京の人、田舎の人、どこにしろ同じで、微分値は変わってきているということは統計的にもそうだろうし、意識の上でもそうではないでしょうかね。ただ、言い過ぎになるかもしれないけど、やっぱり日本の絶対値はいいところにあるんではないでしょうかね。それは僕でも思うんですけど、ニューヨークは景気がよくなってきたからね、ずいぶん安全になったみたいですけどね。でも、あるところは行かない方がいいところは大都市に行けば必ずありますよね。そこへ入るとわかんなくなっちゃうとこがね。そういうところは日本にはまだ無いような気がしますけどね。

伊藤　まあ、歌舞伎町なんかは・・・。

藤野　行かないからねー、僕は

伊藤　いや、今は普通の人でも行きますからね、危なくなってきたといっても。

藤野　ただ日本人はそれほど深刻ではないんですけど、外から見ると地震でのリスクというのは外国人にとっては凸メガネ的に拡大されてうつっているみたいね、地震というのが。日本に来ると神戸みたいなのとか、だからテロと同じですよね、神戸の震災を見ると。東京で起こったら、やっぱ家族なんかは守れないんじゃないのかとかそういう意識があるみたいですね。

伊藤　外国人がですか。

藤野　東京でビジネスを展開して行くときに、オフィスビルはチェックするけど、家族まではセキュリティーができるかっていうところはなかなか難しい判断らしいですよ。私が聞いた話なんですけど、日本は男社会だからあまり家族のことは考えないんだけど、向こうは家族全体を考えて、子供にとって安全な学校があって、医療があってというのがベースですよね。大体家族いっしょに来るから。そう考えると、東京っていうのは危険度がどうもわからないと。で、保険屋に聞くわけですね、でも彼らもわかる分けがない。そうすると、専門の先生や公的機関に聞くのだけど、公は地震に対するリスクなんて、こうだなんて教えてくれる所はないから、なんとなく情報が不足したまましょうがなく判断する。そんなに判らないならシンガポールに住んだ方ががいいやと。どれだけ決定的な要素になっているかわからないけど、犯罪に対して日本は非常に低くてまだいいと、自然災害についてはどうなるかわからないという意識が、外国の人にはあるみたいですね。特に長期間滞在するグループにとっては。この前ドイツ行ったときにドイツ大

使館に呼ばれたんですけど、ドイツ大使館も今度建て替えるんだけど、今までは耐震性がそうでもなかったので、今度の大使館はかなり強固なものを作るんだといってましたよ。清水かなんかに頼んで。免震とかね。まあ、いろいろあるんでしょうね。立派な建物でしたけど、建て直すって言ってましたね。

伊藤　この前、首相官邸も出来上がりましたね。

藤野　あれも清水だけでやったの？。

伊藤　いや、清水だけではないですけど、メインはそうです。非常にチェックの厳しい現場でしたけど。

藤野　まあ、そうでしょうね。センサーでも埋め込まれたみたいな。

伊藤　防弾ガラスなんかは5cmくらいあるらしいですよ。

藤野　話がずれて申し訳無いです。

伊藤　いえいえ。今おっしゃったような災害の、その外国人から見た災害の怖さというか、これは年を追って大きくなってきたということですね。

藤野　いやー、あれは神戸の印象が大きいと思いますね。って言うのは日本というのは耐震構造をちゃんとやっている国という印象があったわけですね。日本とカリフォルニアは地震が多いので、日本人もそう標榜してた。だけど実は昔のものなんだけど、耐震設計が十分ではないものが街中にごろごろしていると。それだと本当に大丈夫かしらと。

伊藤　阪神淡路大震災で高速道路が倒れてしまったとか。

藤野　そういうのはテロ事件と同じだと思うんですよ。逆にいうとニューヨークのテロと神戸の高架橋だよね。高架橋は僕らの専門なんで。

伊藤　そうすると今先生の話の中で近年犯罪に対しても、実は社会とか災害とかに対しても、もっと大きくいいますと、環境問題とかですね、子供の教育問題とかいじめなんかも含めたそういったことが昔に比べて、脅かされているというか、危機意識は高くなっているとお考えですか？

藤野　だけどこれは文明が進むとしょうがないのではないのかと思うんだよね。われわれの生活はだんだん便利になってきている。昔、同じ事が起こっても大した物でもなくても、どんどん便利になって行く社会とともに危機意識は格下げしていくんだな。災害が起こるとこのレベルまで落ちていくんだけど、みんな便利になっていってものの便利さの、便利になれば不便との距離が遠くなるわけだな。不便というか災害などから距離が遠くなって、頻度が減ってますよ。関係無いけど、子供のとき停電なんかは台風が来るとよくありましたし、台風なんか来ると、家の窓とか補強してましたし、今じゃなにもしないですもんね。何も備えないという意識がみんなの中にあるんですよね。家が台風なんかに壊されることは無いという意識が強いから、本当にそうなったときは、みんな「なんだなんだ、そう言ってくれればよかった」と、そういうことになりますね。そういうところはありますね。だから、ある種の必然ではないかと思うんですけどね。別に災害がひどくなったのではなくて、便利さの方へわれわれがあまりに動きすぎたから、そこの原点へ帰るとものすごいダメージが社会にあるという感じじゃないのかね。

伊藤　研究会のメンバーに社会学がご専門の奥田先生がいらっしゃるんですけど、奥田先生が言われるのはですね、たとえば犯罪なんかにですね、近年凶悪な犯罪に巻き込まれる確率が非常に高くなってきていると。これは都市に住む人間が払わなければいけないコストだとおっしゃっているんですよね。で、やはり都市の中にはいい人だけでなくいろいろ考えている人が、都市の魅力なり何なりに引き寄せられてくるんですから、当然そういう所で犯罪に巻き込まれるのはコストであると。逆にそういった安全や災害に対するインフラみたいな話とかですね、そう言ったものだとかはむしろコストとか言うよりも便利になりすぎて、気づかなくなってしまった。要は退化してしまったんですね、人間が。

藤野　そういう所はあるんじゃないかね。それ以上の考察は僕にはできないんだけど、まあ話しちゃうけどね。僕ら自動車社会だから、人間の肩が触れ合うみたいなことが満員電車では否応無しだけど、なんとなくそういった感じは無くなってきてるから、車に乗ってる人って言うのは性格が変わっているように思えるよね。得にメルセデスとか乗ってる人とかね、本当にたちが悪い。この前、家のそば歩いてたら、普通に僕が歩いているのに車がよってくるから睨みつけたら、降りてきてつかみかかってくるんです。半分やくざだったけど僕たちの中にもそういうのがあるのかなという気がしますもん。いい車乗ってね「俺が1000万近く出した車だ」みたいな感じでね。あれはなんとなくやだね。もうちょっと人間が歩く町にしないとだめだね、まあ私の専門ではないけどね、都市計画だから。

伊藤　人間が歩いている町の方が自然ですよね。街や住宅地なんかは。

藤野　人間の五感がつかえるような町。目と目が争うんじゃなく、合う街っていうのをね。そしてみんな無防備でね。車なんかは武器だ。まあ全然関係無いけどね。難しい質問ばっかりされるな。
伊藤　今先生もそういった都市におけるいろいろな危機感というか、そういったものが、昔よりもあがってきているということで、たとえばこのままいってしまうというか、このままの状態ですと、もう 10 年後、20 年後なんかになりますと、われわれもいろいろな危機意識がありますけども、どうなってしまうのか。もし、そうならないためには、たとえばこれからどのような政策とか、まあ、一人ひとりの行動かもしれませんけど、どうしていったらそうならないようになっていくのかと。
藤野　難しい質問だな。話変わるけど、僕が都市・社会のセキュリティシンポジウムをやったのは、非常に合理的考えなんですよね。私のところは共同研究室って書いてあったでしょ。だけど専門は橋梁なんだけどね。橋は橋なんだけど、たとえば地震に対する被害とか、神戸の時はやってなかったんだけど、風の問題とか、そういうのをやってきたんだけども。僕らは今まで物を相手にしてきたんですよね。橋だとかビルだとか。それはいわゆるハードな研究と称していたわけね。ところが、やっぱりそんなに最近は新しいものは作らないんですよ。今まではどんどん新しいものを作ってきた。いわゆる 30 年は、もうインフラの整備だったんですよね。だからハードを作ると。そうするとどのくらいの風でどう挙動するか、どう地震に対処するか。これがハードの技術で社会的ニーズが高っかたんですよね。ところが、最近はふと気づくと「新しいもの作らないならおまえらいらないよ」という雰囲気があるような気がしますね。ところがそういうハードな技術というのは、一回死ぬともう戻らないんですよね。いろいろと積み重ねてきてるから。だから、僕の知識には前からずっと、先代からずっとの知識が分厚く植えつけられた上で、今の研究が行われているんですね。で、こういう研究が途絶えると、次の時代から都市計画だ、といって。ちょっとごめんね、そういう風なことを言っていると、ちょっとハードなことを聞くと多分もう分からないとか、なにやってるんですか、ということになる。僕らも物を相手にしてきたけど、シンポジウムの最後にも言ったけど元々の目的は、社会を安全に暮らすために、インフラを整えてきたわけだし、じゃあ、我々は実際に社会のインフラというか社会の安全を解決できてきたかといったら、そんなことはない。我々のグループ全体はいろいろな細かいハードな技術を養ってきたわけですよね。それがハードなものを飛び越えてですね、その究極な問題である、街、都市を安全にするという目的にはいろいろな形で使えるはずなんですけどね。だけど、僕らはあえてそのチャンネルを物ばかり相手にしてきたから。もうちょっと向こう方からの人と話を議論すれば、きっと我々の情報は役に立つし、また、彼らが何を欲しているか知ることは、昔と違ったハードの研究にフィードバックするというつもりがあってやったんだよね。そうじゃないとハードは死にますよ。物を作らないのは工場がつぶれるのと同じだからね。やっぱりニーズがあって、研究があるんだよ。そのニーズが無くて研究やる、その趣味的にやるっていうのは、一人、二人あるかもしれないけど、パワーとしてのその気概を持たないといけないんじゃないかなと思うんですよね。だから、何が何でもあなた方とか警察とかそういう人達と話して、おまえらは何を持っているんだとか、どうすれば社会をよくできるのかっていうのを議論していく時が来たのかなと。だから、それは建物が壊れてしまったのとか、どうなおすのが一番いいだとか、いわゆるハードな技術を温存するひとつのやり方、オルタナティブなんじゃないのかなと思ってやってるのですよ。だから、あんまり高揚な考えを持ってやっているのじゃないよ。別に安全について見識を持っているわけじゃないのだよ。でも、警察なんてね、この前来たんだけど、交通については多少技術屋さんも入っているんだけど、他の犯罪なんかってゆうと、法学部の人間が牛耳ってるだけで、彼らは技術的なものをなにも持ってないんじゃないですかねという気がするんですがね。まあ、科学警察研究所っていうのはあるんですけどね。で、それこそセコムとかね。ああいう方がどちらかといったら熱心だよね。郵政省以上になっちゃうんじゃないかと。民営化するわけにもいかないしね。もうちょっと警察っていうのは安全に対して研究をしないと。ただ捕まえるだけが彼らの役割じゃないんだよね。そういう意識はあるよね。
吉川　けど、警察が民営化するっていうのは別にありえない話じゃない。アメリカなんてほとんど民営化みたいなもんだからね。
藤野　ポリスってほとんど民営化なの。
吉川　あるけども、ほとんどそれと同じようなことは民間でやっていて、たとえば同じ建物に入ると警察官とガードマンが一緒にいて、ある部分は税金で守ってて、ある部分は家賃で安全を・・・。
藤野　いや、警察という人達は、防衛庁と同じなのかなと思って、大学との関係はね。大学は防衛庁と研

究はやらないんですよ。でも、警察署は存在そのものは善だよね。でもね、警察っていうのはやっぱり一緒になんかやってあげるべきじゃないかなと思ってるんだけどね。
伊藤　私もそう思いますね。
藤野　彼ら何も動かせないんじゃないかな。研究所があってもあまりに小さいしね。最新のいろんな技術をどう使っていったらいいかなんていう検討を、内部でできるキャパシティってゆうか、ポテンシャルがあるのかな。
伊藤　やっぱりそういう意味では、こういう世の中になってきた時に、いろいろな専門家が、ハード、ソフト、それから社会の役人さんも含めて、やっぱコラボレーションして行くと。で、それぞれの強みを合せて、新しい社会の変化に対してどんなことができるかということをそろそろやってく時期に来てるんじゃないかと。
藤野　それは事実で、僕の思ったことは、もうちょっと意地きたない。何とかして我々の研究グループをやってる人達が、社会に貢献してるという意識が直に持てるようにしないと。若い人はね、どうしても、もっとニーズのはっきりした、情報とか何とか言っちゃうんですよ。だけどあんなものは日に日に変わる分野だからね。情報だってコンテンツ次第だからね。中身がない情報なんてねえ。だから今そういう意味じゃ難しい時代にきてんだよね。だから何とか成功させたいなと、まあ、させるのが僕の役目なのかなと思って、定年までがんばろうと思ってんだけどね、まあ伊藤さんと知り合ったしねえ。
伊藤　そういう事を、今後やっていかないと、このままのやり方ではもう今後、どんどん社会は悪くなっていくと、特に都市部の場合はですね。悪くなっていってしまうのですかね。それとも何にもしなくても、あるところまでいくと自然治癒能力みたいなものが働くのか。
藤野　どうなんですかね、僕もわからんね、未来予測はね。
伊藤　特に戦後はもろいですよね。
藤野　だけど日本はね、やっぱり非常にセクショナリズムが強いと思うんだよね。僕なら例えば橋やっていますよね。橋やっているとき建築家も橋の設計デザインができちゃうんだよね。で、そういうのが来るとなんとなくものすごい対抗意識が、グループの中で出てきちゃうでしょ。本当はコラボレイトしたらいいものができると思うんだけど。役人もそうだよね、やっぱり僕ら自由でないっていう意識がするよね。だから、どうしてそうなったのかってゆうと、やっぱり外から守られてないと自分の存在が無いという意識が強いんだね、僕らね。自分で自分を守るとか自分で自分をって意識があまり無いからなんか外から外圧が来ると、群で抵抗しようって意識があって。これはまあ、今までは良かったところもあるのかもしれないけどね、ま、よく言われてる猪突猛進でやればいいっていう時代からはねえ。これからはそうならないから、どうやってそういう意識を若い人たちに植えつけていくかってことだよね。若い人たちを強くしなきゃいけないというのが僕らの合言葉なんだよね。東大生なんかもひ弱ですからねえ。まあ、お母さんのお受験お受験で来てる人たちがかなりいるでしょ。これが社会のリーダーになるというのは、やっぱりどこかでいろいろ改善させてやらないとね。基本的に良くできる人だからやっぱりこれも教育なんだよね。話がずれちゃったね、何だっけ。
伊藤　都市がどんどん悪くなるということは、結局は教育がそれのための原因だっていうようなことになるのかもしれないなと思いながら聞いてたのですけども。
藤野　やっぱり、ハードの質の劣化は止められないですよね。われわれの土木構造物もそうだけど建築物もやっぱり、非常に安普請が蔓延してるし、今でも安普請が乱立してるって感じじゃないの。
伊藤　そうですよね。
藤野　まあ20年や30年は持つと思うけど、内装を改修する価値があるものを作ってるのかなというふうに思いますよね。悪いシナリオはいくらでもありますね。そう言うときに日本は個人の金があんまりなくてスラムみたいになっていって、一部の人だけがお金があって、2億3億円のマンションを持ち、外資系かなんかで働いて。僕なんて52でしょ。あと20年ぐらいは社会に貢献したいじゃないですか。だけどそういう風な社会のシステムにしてくれるかどうか、するのかどうかね。能率は落ちるんだけど、みんながやる気を持ってなんかやって、生産的なことに、社会の活動に参加できるようなシステムじゃないと、若い人の世代間闘争は激しくなるし、我々が少ない恩給をもらうだけになるとね。今の社会はなんとなくそんな役人達にしがみついてるだけ、生産的なことをやるっていう意識が無くて、権力にしがみついて、なんか金をもらっているっていう所があるじゃない。

吉川　今は特に、50代以上の人は、黙っていればいれば食い逃げできますからね、年金なんかはね。騒げば減っちゃうとかね。
藤野　天下りとか、役員なんかとかね。だから、僕らのような若い50代なんかは責められてるんだよな、他の世代から。逃げの姿勢だよね。
吉川　そうでしょうね。
藤野　逃げの思考があるんだよね。団塊の世代ですね。
吉川　そうですね。私もそうですよ（笑）。
藤野　そうですか。でも僕ら何とかしなきゃね。60代になったって90になっても、やっぱり社会に対して貢献していたいと思うもんね。ただ営業部に入って役人なんか知って、その顔で仕事をとるって言うパターンばっかりだからさ。
伊藤　お金をかけなければいけないってことですかね、社会の安全に対して。
藤野　すいません。本筋からずれてね。
伊藤　今までのお金のかけ方というと、まだまだやっぱり防災面は足りないと・・・。
藤野　僕が言っている主旨はね、ひとつはね、御上主義をやめた方がいいと、御上とやっているからリスクの定量化も個人個人では必要ないと。自分に自身がないから、警察に頼めば、国に頼めば、なんか金を出してくれる。こういう社会はもう無理だし効率も良くないし、自分がいい家を建てて良い家だったら保険も入るとかね。リスクが減ったから地価も上がるとかね。やっぱりみんなきてくれるとか、そういう社会にしてった方が良いんじゃないかっていうのはあるね。今は、いい子も悪い子も全部点数は表さずと。だから神戸でもやっぱり震災で困った人達もいるんだろうけど、国からずいぶん補助も出ているんだろうな。ちがうかな。
伊藤　いや、個人には出ていないのですよね。確か、去年でしたっけ。鳥取の震災で、片山知事が独断でですね、いや議会はちゃんと通しましたけど、はじめて片山さんが、県予算による個人の住宅補償というのをやったんですよ。阪神淡路大震災の場合はあれは公共の建物なんかには出ましたけど、個人にそういった補助金なんかは出ていないと思いましたよ。
藤野　日本人の意識はどうなんですかね。一般的になんかあったときには国が面倒を見てくれるって言う意識を、なんとなく持っているのか。潜在的に。あるいは国は頼りにならないという意識があるのか。
吉川　それはやっぱり90年代にずいぶん変わったと思うんですね。それまでは今いったようにあったけれども。とにかく今はお金がないということがかなり伝わったんではないでしょうかね。
藤野　それはずいぶん上がってきたとでも、たとえばだけど、話小さくなってしまうけれども、保険やさんは、僕らのテリトリーに戻しちゃいけないけれども、ノウハウはないんですよね、技術的なね。だからいい建物を作る。あるいはその地域が火災に見舞われにくいとか、そういうのを判断する技術はないんですよ。だから別に鉄筋と木造くらいの区別はするんだけど、それ以外の情報はあまりいれないんですよ、面倒になるし。だけどそういうことができる時代になったんだよね。極端に言うとパソコン一台でね。そういう技術を使ってほしいんですよね。で、彼らはやっぱ事務屋のかたまりでね、悪いけど。今のアドバンスした技術を享受してないわけだな。もったいないんだな。で、それが新しいマーケットに出てくるわけだし。まあ、要するに社会の活性化につながるんじゃないかというのが私なんかの考えなんだけど。
伊藤　だから、そこもコラボレイトしないとだめなんでしょうね。
藤野　そう、だから僕らの持っている情報はどういう情報だと、彼らの欲しい情報はどういう情報だっというのを議論する場としてシンポジウムをやったわけで。だから、もう一回ああいうことをやろうと思ってるんだけども。彼らが何を欲しているか、そして僕らが何を提供出来るのか、それがうまいことマッチする、あるいはニーズがあれば、それに追いつくという、我々の方でね。そういうことやってると、もっともっと我々自身も活性化するし、彼らだってハイレベルな技術が展開できる。外国はそういうことをビジネスでやってるんですよ。保険屋さんでも。外国は裏はいいかげんなことやってるけども、システムだけはすごいんだよね。日本はシステムを見かけ上作らないんだよね。恥ずかしがって。
伊藤　先生、最後にですね、その他ご自由な意見ということでお聞きしたいのは、近年のこういった環境問題でも社会問題でも、特に犯罪なんか問題になってると思うんですが、報道のあり方というか、その、テレビも新聞も含めて、そういうのがたとえば人の不安感を助長してるとか、もう少し淡々とできないかとか。まあ私はそういう意見を持ってるんですけども。たとえばなんか大きな事件が起こると、根掘り葉

掘りやりますよね。で、もうワイドショー化して、まあ政治もワイドショー化してるというのもあるんですけども。これはもう今後このままいってしまうのでしょうか？
藤野　まあ、テレビの場合はスポンサーがつくかどうか、新聞は購読者がいるかどうかだよね。ようするに大宅壮一が昔、一億総白痴化といったけど、なんとなくインテリって人が減ったような感じするよね。だから、朝日新聞だって地味に報道してると売れないって事でしょ。だから、新聞が悪いのか、やっぱり我々のインテリレベルっていうかが下がってるんだよね。社会全体がね。アメリカはまだちゃんとした雑誌なんかありますよね。ヨーロッパなんかもそうですよね。もちろん、三文新聞みたいなのもありますけどね。イギリスだってザ・サンとかいう新聞はありますよね。
伊藤　タブロイド紙ですね
藤野　あれはまあお下劣なゴシップしか載せないけど。我々の社会はいろんな人いるから、そういう人も・・・。日本社会はあんまりバラエティないよね。
伊藤　そうですね。
藤野　それが怖いんだけど、どうしたら良いのかね。だからそういう新聞があったら僕らが買うかとうことなんですよね。ああいうのだって営利企業だから。その、サプライサイドとディマンドサイドというのがあって決定するわけで、NHKだって同じですよ。いい番組もあるけどね。やっぱりくだらない番組も多くなってきたよね、昔より。NHKなんて昔に比べたらほんとに変わったよね。で、それはどのようにしたらいいのかって言われてもね。ちょっとどうしたら良いのか分からないけど。確かにゴシップ的になってきたね、世の中のものが。
伊藤　私もあまりワイドショーとかは見ないんですけど。たとえば犯罪が起こりますよね。例えば最近では、毒入りカレーとか、ああいうのが起こるともうワイドショーで、手口から犯人の生い立ちから全部やりますよね。で、私はこういうものを報道する必要はないと思うんですよ。
藤野　見る人いるんだろ
伊藤　ですがモラルの問題として、こういう事件がありましたと、淡々とこういう被害がありました、ということで、その後、裁判でこういう風になりましたよとか、最低限の報道にならないものか。私はなぜ、どういう風に何回刺したかとか、背中に十何ヶ所の傷があった、とかですね、どうしてそこまで彼らは伝えなければならないのですかね。
藤野　朝からそんなにテレビを見る時間があるのかね。
伊藤　新聞でもそうです。新聞でもどのように刺したかとか書いてありますよ。そんなの何で刺されて刺殺しましたでいいんじゃないかと思うんですけど。なんか手口まで書かないとやっぱ新聞も売れなくなってきているのですかね。
藤野　商売だけでなくてね、どの職業にもモラルってものがあるからね。検察のモラルっていうのも昨日新聞に出ていたけどね。その人は、モラルハザードだって言っていたよ。役人のモラル、大学の先生のモラル、新聞のモラル、そういうのが崩れてる悲しい現象かね。これを若い人はどう見ているのかね。中学生とか思春期の子供達は、どんな風に感じてるのかね。反面教師っていうのがあってくれるといいんだけどね。
伊藤　インターネットなど見ていると恐ろしいですよね。書きこみなんかに、ある事件が起こると、みんな面白おかしくいろんなこと書きこんでね。
藤野　それは名前も出ないのね。
伊藤　出ないですね。
藤野　僕はそういうものにアクティブに参加してないからね。分かってないんだな。
吉川　今おっしゃったように、アメリカやイギリスなんかと比べても日本はモラルが低いという印象ですか。
藤野　僕はあまり見ないですけど、朝のワイドショーとか、たまに見るし、地震のときなんかは見ましたよね、まあ、時間があるからそこに何でもいいから話題を持ってくるって言う感じだもんね。レベルを問わずに、時間があるからそれに対するニュースを下ねたも含めて、全部入ってくるよね。情けないね。ああいうアナウンサーだってちゃんと一流大学を出た人達がやっているんだろうに。生活のためなんだろうな。情けないね。アメリカもあるのかな、ああいうの。
吉川　あるにはあるけど、僕の印象としては、アメリカのテレビ番組はそういうのはあるけども、もっと